

## 〔駐村研究員だより〕

### まちの活性化と公益法人

宝 田 喜美男

何か明るい話題がないだろうかと探したが暗いことばかりが目につく昨今である。とりわけ平成5年は決して忘れられない年になった。昭和55年の大冷害を経験し、その当時はもうこんなひどい冷害は2度とないだろうと思ったが、それ以上の皆無作であった。

また、特産の田子牛（黒毛和種）にしてもここにきてやはり、輸入自由化の影響を受け繁殖・肥育とも販売額のダウンは避けられない。

さらに、「日本のにんにくの首都」を宣言している「田子にんにく」についても、超低価格の中国にんにくの大量輸入の影響で価格が低迷している。

これらの作目、米、牛肉、にんにくは共通してる国際化と対面しており、このような厳しい状況が長く続くと予想されることから長期的な対応を考えざるを得ないだろう。

そこで、現在わが町での特徴的な取組みでこれらに対応できるかどうか紹介してみたい。

米については、県内外の生協と提携した有機低農薬米「ゆきこ」の生産販売である。生産については堆肥センターが稼働し完熟の良質堆肥が供給される体制ができ、乾燥調製についても常温定湿乾燥方式による自然乾燥に近い食味向上をメインとした農協のライスセンターも平成5年に完成し、生産体制は整備されてきている。

肉牛については、販売方法について農村振興公社によるホテル等への直売方式の拡大を図っている最中である。

にんにくについては、A等級の大玉(2L)は輸入にんにくの影響はないと言っていい。しかし、全体の数量の中でそれは努力しても

2割弱しか占有できない。他のL・M・S玉は影響が大きく安値安定となっている。栽培技術面では相当高い水準まで至っていると自負している。やはり販売加工面での工夫も必要ということで農協でのにんにく加工品の種類の充実、包装、デザイン等の見直しに取り組んでいる。

これらの作目については、それぞれ近年設立された社団法人、財団法人が大なり小なり関わっている。社団法人田子町農村振興公社は平成3年3月に堆肥の製造販売、肉牛の肥育販売を主目的に設立され、年間堆肥2千t、肉牛75頭の実績となっている。町34万円、農協1千5百万円、その他5百万円の出資金で運営されており、経営的には簡単ではないが、米、牛肉の輸入自由化に対抗するためには事業の必要性が明白なだけに今後の事業展開が期待される。

また、財団法人田子町にんにく国際交流協会は平成5年4月に2千百万円の出資でにんにく物産の振興、国際交流の推進を目的に設立された。現在、構改事業で建設されたガーリックセンターを拠点として世界のにんにく加工品の展示販売、地元田子町のにんにく加工品の開発展示販売を手がけている。特に前述の農協の新加工品の開発と包装デザインの見直しについては、財団が側面から援助する形をとっている。今後は安い中国産にんにくを使った加工品とどのように競争していくのが課題となるが、当面は高品質田子にんにく使用での差別化を図る戦略を展開するしかないだろう。

以上、わが町の主要作目の取組状況と社団財団との関わりについて述べたが、他に財団タブコピア(創遊村)、財団にんにくネット(CATV、設立準備中)があり、これらの社団、財団の活動をてこに昨年来の暗い状況から抜け出し、元気のあるまちづくりを目指したいものである。

(青森県三戸郡田子町・役場職員)